

ティークの „Des Lebens Überfluß“ について

—— 社会との関係の問題をめぐって ——

三 木 恒 治

岡山理科大学

(1992年9月30日 受理)

序

1819年夏、後援者であると同時に生涯の伴侶ともいえるフィンケンシュタイン伯爵未亡人ヘンリエッテの希望もあり、ティーク一家は彼女と共にドレースデンに移り住む¹⁾。以後1841年プロイセン国王F・ヴィルヘルム4世の勧めでベルリンに戻るまで、彼はこの地でノヴェレ、ドラマを主体とした創作活動に精力的に勤しむことになる²⁾。普通研究者の間では、1795年から1815年までのベルリンを中心に活躍していた、「ファンタスス」ロマンに見られるような現実離れした幻想的作品を主に扱っていた時期を前期、そして同じようなテーマながらも時代や社会の問題を色濃く折り混ぜて再び量産体勢に入ったドレースデン時代を後期、というふうに区分している。

後期のティークは、ベルリン・イエーナでの青年時代のようなアカデミックな文学・芸術サークル（無論ドレースデンにも様々な芸術サークルは存在していたのだが）からは距離を置くことになるが、ザクセンの宮廷人として、より広範な階層の者が集う社交の場にとりこまれることになる。こうした外的背景もあって、この時期の作品は以前のものとは趣を変え、主として日常の次元を舞台としたものへと作風も転換する。ここには初期の作品にみられる瑞々しさ、深層を鋭く抉り出すような迫力は影を潜めているものの、何よりも物語作家として円熟の境地に達したティークの技法の数々を垣間見ることができる。

本論では、社会との関わりの度合いを増したこうした後期のティーク像に触れてみるために、1839年成立の „Des Lebens Überfluß“（「生の過剰」）を、ノヴェレの特徴を中心として考察してみたい。

I

ドレースデン時代の1822年から41年に至るまでの20年間で、ティークは40もの短編小説（Novelle）を書いているが、 „Des Lebens Überfluß“ はその最後の時期にあたる作品であり、歴史小説 „Vittoria Accorombona“ とほぼ同じ頃創作された。しかし、後者が悲壮感溢れる大作であるのと対照的に、身近な出来事を題材に軽妙なタッチでまとめ上げた小品となっている³⁾。

物語はまず、三月革命前の不穏な時勢を映し出すかのように、無神論者の反逆が湧発し、ヨーロッパ全体ひいては東洋にまで及ぶ世界的規模のものになりかねないというものものしい報告ではじまる。それから語り手はこうした概観から目を転じ、この騒動の張本人であるハインリヒとその妻クララの身辺へと焦点を絞っていく。そして「さまざまな噂がとび交い、通常の出来事が寓話の色彩を帯びるのは世の常」⁴⁾と語り手自身断っているように、最初の報告とはうって代わって、瑣末で珍腐な事件が繰り返されていくことになる。

物語の主人公となっているハインリヒとクララのブランド夫妻は、人が群がる大通りの直中にあるものの、両隣りを大きな家に挟まれ、また下の階の屋根が突き出ているために視覚的にも殆んど外界からは閉ざされた古びた小さな家の二階の部屋に棲み、お互いの間で交わされる眼差しと会話だけを生活の依り所として暮らしている。

こうした閉塞した状況設定は、„Der blonde Eckbert“ (初期のナトゥーアメールヒェン) と似通っており、人里離れた森の中と囂しい巷間の違いはあるにせよ、外界から取残された主人公が現実の法則の支配外に置かれているという共通点を持っている。そのような実存的な局面と呼応するように、ここでも物語は、ハインリヒが日記を逆から読み直し、自らの辿ってきた人生の軌跡を回想していくという逆転した時間相を帯びて進行していく。ハインリヒに言わせれば「それは自分の人生に対して理解を深めるため」⁵⁾ということであるが、彼のみならず読者にとっても断片的にはあるが、夫妻の今の境遇に至る経緯——ハインリヒは母親の遺産によって外交官の職に就くことができ、将来を嘱望されていたのだが、赴任先でクララと恋に陥ち、彼女の父親の反対などに遭った挙句、職を辞して社会の目を逃れるように駆落ちし、今では誰ともつき合わずひっそりと暮らしているということ——が紹介されるよう工夫が凝らされているのである。

勿論「日記」だけではなく、現実に背を向けた彼らの「現在」の生活も同時進行的に折り混ぜられていく。筋を二つに分け、一つを緊張の極まで導きそこで停止させ、もう一つの筋へと新たに立向かい、解決において両者が出会うという「交互の語りの形式」は特に後期ティークのメールヒェンノヴェレの特徴とも言われているのであるが⁶⁾、ここでも物語は、日記の朗読、夫妻の会話、三人称の語りなど、W. J. リーマンも指摘しているように、多層の語りのパースペクティブと時間相が交錯して進められていくことになる⁷⁾。

II

その地勢的相違にもかかわらず、主人公の状況設定が „Der blonde Eckbert“ と似ていることは先に触れたが、それだけではなく物語の中に挿入される枠物語の技法 („Der blonde Eckbert“ ではベルタが語る自分の少女時代の不思議な体験談) もここでは「日記」という新しい形で踏襲されている。その中でも特に興味深げにハインリヒがクララに語って聞かせる「夢」の部分は、「枠」の中核として象徴的な意味を担っている。現実から遮断された彼らの対話が寓話じみたものとなっていく、ここでは「夢」も「生において大きな部分を

占める」⁸⁾ことになるのは当然の帰趨であろうが、ただその内容には以前のものとは異なり、新しい時代の世相が盛り込まれている。

ハインリヒはティークの青年時代を思わせる多読家であり、巷での本のオークションの情報にも胸躍らせるマニアなのであるが、「夢」の中では自分自身が競りにかけられ、その顛末が描かれている。そして他の短編同様、物語がここで暗示的に凝縮され、全体を予感させるものとなっている。「夢」の舞台となっているオークションでは、個人の持っている特性は徹底的に疑問視され、社会的な有用性の尺度の客体としてのみ扱われる⁹⁾。役立たずとして当初二束三文で買い叩かれようとしたハインリヒが、突然現われたクララによって値をつり上げられ、その額で今度は立場を換え（無論「夢」の中であるから脈絡は支離滅裂なものとなっているのだが。）、ハインリヒが競りにかけられたクララを落札しようとする場面は、恋愛に代表される基本的な人間感情すらも、ここでは金銭価値に置き換えられてしまうことを意味している。世界はこうした市場の掟に従って機能しているのであり、市民とは正しくこうした交換価値に死ぬまで縛られている存在なのである¹⁰⁾。クララを獲得するために、それだけの大金を持ち合わせていないのに不当にその値をつり上げたハインリヒは、それゆえこうした市場の掟を破ったことになり、この光景は社会のルールを無視しクララと駆落ちしたハインリヒの姿に、そのまま重ね合わせることができる。そしてここで登場する市場が象徴している「交換」概念は、そのまま物語全体を覆い尽くしてしまうことになる。

「夢」で展開される情景は、時代背景としては三月革命前の市民の知性が官憲に抑圧され、個の人格が危機に曝される反動的な世相を反映している。しかし経済的な側面に目を向けると、貨幣交換市場は近代市民社会の抱えるメカニズムでもあり、従って一方では古き良き社会秩序の崩壊をも同時に表したものとなっているのである。だからここでは進歩的な経済体制と反動的な政治体制がネガティブに共存しているといえよう。つまり個人の信条とは無関係に、経済的な自立があってはじめて社会的自由が獲得できるのであり、理想的な生の構図も実現可能となるわけである。それが欠けているために掟を破ることとなった「夢」の中のハインリヒは、公金横領の科で逮捕され、獄に繋がれパンと水だけの生活を強いられ、それでも事足りるとせざるをえない。（これも現実の彼らの状況と酷似している。）そして挙句の果ては国家転覆を計っているという論外の罪を自ら認め、悔い改めて死刑台に登る。「夢」が深層心理の鏡像であるとするなら、この場面は、国家の視点からは個々人が不当に高く評価されるとモラル、美德が消失してしまい、引いては国家の危機に繋がるということをハインリヒが十分納得していることを意味している。つまり、いくら虚勢を張っても、潜在的には「社会的存在への復帰」という命題が彼の心を捉えて離さないということである。

「夢」と「現実」との連続性が初期の作品と同じように問題とされるとはいえ、ファンタジーの世界だけで自己の生を全うできるという自己完結的性格は、この作品をはじめ後

期のノヴェレでは減少する傾向にあり、また夢の中でのみ個と社会の軋轢が解消されるといふこともなくなる。それに代わって初期の作品では稀薄であった「社会との関わり」の部分が、ここに見られるようにクローズアップされてくるのである。

III

「夢」の中で、現実の彼らの行動とは裏腹に社会への関心が顕在化していることは今述べたが、そもそも彼らの社会からの背反の由って来たる所を考えると、それは決して彼らが自発的に望んでのものではなく、社会の側から拒絶されてのものであることは明らかである。加えて彼らがいくら孤高の美学をふりかざし、窮乏した現状を美化しようとも¹¹⁾、忍び寄る飢餓と寒さは終生凌ぎうるというものでは到底ない。してみれば彼らの抵抗には自ずと限界があり、追いつめられた彼らの現実に対するアンビヴァレントな態度が、物語の後半では次第に露呈してくる。そしてその過程を推し進めていく役割を果たす小道具となっているのが、階下と二階の彼らの部屋を繋ぐ「階段」である。

ある日召使いクリスチーネの姿が見当たらないことを不審に思ったクララは、彼女が階下にいるのかどうか確かめるため下へ降りようとするが、そこでいつもなら二十二段あるはずの階段が、最低限の用を足すための四段だけ残して取り去られていることに気づく。暖を取るためにハインリヒが削り取ったのである。

突然出来た珍事には違いないが、この事態に至るまでの伏線となるべく、短編ならではの前置きが巧みに仕掛けられている。例えば主人公の姓ブランド（Brand 火事）がこの壮拳を想起させるようなものであるし、クララがいつも目にする焚木の中に目新しいものが含まれてくるようになったこと、また寒さを凌ぐという問題がしきりに語られていること等々、読者にはそういう形で予め物語を解く鍵が与えられているのである。

ところで、唯一の社会との接点とも言うべき階段の消失は、一見彼らの閉ざされた状況をさらに一層強めるように思われる。ハインリヒは、ノヴァーリスの „Heinrich von Ofterdingen“ の同名の主人公のパロディーだとする見方もある。自身 Zauberer と称するティークのハインリヒの現実を美化する一連の創作活動は、見慣れたものを不可思議なヴェールで覆い、有限なものに無限の仮象を与えるというノヴァーリスの原理と、次元は異なるが通底するように思われる。例えば階段を削り取り焚木の材料にしようとする事は、階段を原材料、つまり自然の状態へと戻す試みと解釈することもできる。しかしこうしたロマン化の魔術師ふりが如何なく発揮されるのは、具体的な行動よりは、自分の境遇・行為を正当化していく全篇を通じての言葉遊びにおいてである¹²⁾。二・三例を挙げると、「全てを失っても我々自身を失わなければ、このままで十分幸福である。全て順調にいったらば、お互いに見つめあうことも会話もなく、ただ世辞を言うよう調教されるだけで、群衆の中で永遠に孤独でいなければならなかった。」¹³⁾ のであり、粗末な食事も水っぽいスープも「二人の接吻と会話によって味つけされていけば十分美味しい。」¹⁴⁾ したがって『『バックスとセ

レネーなくてはビーナスも凍えてしまう』という格言は嘘だ。』¹⁵⁾とラテン語の修辞も時折り交えながら、滔々と弁明を繰り返していく。この階段の削除に関しても、「これで本当に二人きりになった。』¹⁶⁾のであり、前から自分たちをアダムとイヴに喩えていたように、樂園が造り上げられたのである。それでも「未来」のことを気遣うクララに対して、「ここでは未来は現在の中に引込まれており、あらゆるものに未来が眠っているんだ。』¹⁷⁾と慰める。

語り手から見ると、「このような状態を継続していくためには『現在』を忘れるような特殊な軽さが必要だ。』¹⁸⁾という。つまりハインリヒの言葉遊びの本質は、自分に課せられた重みと戯れることだというのである。ここで読者は決定的な矛盾にぶつかる。ハインリヒの「現在」はこの上もなく充実しているはずであるのに、その「現在」が語り手によればなおざりにされているのである。彼らが直面しているのは、まだ厳しい冬をいかに乗り切るかという現実的な問題であり、二人だけのユートピアも根本的な部分で現実に絡め取られている。階段の件もロマン化であるというより、実情は素材の有用性を見込んでのことである。「夢」で暗示されているように、「個」となった人間が効力を失う状況においては、ハインリヒのロマン化も空回りし、否んだ形でしか表現できない。語り手の視線はその点を鋭く暴き出し、必然的に現実を容認せざるをえない立場に追いつめられていく彼らを、むしろ滑稽な姿として提示する結果となっている。これは既にロマン化を脱却した叙述であり、忍び寄る新しい時代の影を見てとることができる¹⁹⁾。

IV

この奇妙な事件を転機として、物語の方は急速な展開をみせる。湯治の旅に出かけていた家主が、その直後思いがけなく帰ってきて、この事態に出くわして忽ち半狂乱と化し、ハインリヒと激しい口論となる。「階段」がなくなることによって逆に家主、さらには官憲とのやりとりという外界との接触が生まれ、ハインリヒの事とする機知に富んだ論駁を再び引き出すことになり、これが冒頭の騒動のさわりへと繋がっていく。

この件で激怒する家主との応酬では、ハインリヒの言葉遊びにはさらに拍車がかかり、対話部分の圧巻となっている。損害を与えられたと口汚く罵る家主を尻目に、木の階段を除くことで新しく鉄製のものにすることが容易になり、むしろ火事を防ぐことができるわけであり、改良の手助けをしてやったのだと開き直る。また周囲から責め立てられる自分自身を運命と苦闘するゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンに喩え、救いの神の出現を待ち侘びたりする²⁰⁾。

ここで「階段」と共に物語を推し進め、最終的にはハインリヒの窮状を打開していく小道具となっているのがカクストン版チャーサー集である。これは昔、誕生日のプレゼントとして友人ヴァンデルメーアから贈られたのであるが、生活苦から心ならずも手離し、さまざま人の手を経た後ロンドンの古本屋に落ち着き、そこで奇遇にも仕事でこの地を訪問していたヴァンデルメーアの目にとまる。それを見て彼はハインリヒの苦境を悟り、こ

の本を手がかりとしてその居所をつきとめる。そして官憲に取り巻かれ一触即発の緊張感が高まった最中にヴァンデルメーアは立派な身なりで颯爽と登場し、ハインリヒを騒ぎの渦中から救い出す。(ヴァンデルメーアの人となり、つまりこの日を思わせるような冒険家気質であることも、日記の初めの方で前もって紹介されている。さらに以前彼に預けておいたハインリヒの資産を投資家ヴァンデルメーアは殖やすことに成功しており、富までもこの友人は運んできてくれたのである。加えてこの友人の口から、今まで社会と隔絶して伝わってこなかったこと、——クララの父も今では昔の頑迷さを後悔し、とっくの昔に彼らを許していたこと、そして今彼らと同じ地に住んでいることなど——が明るみになる。

「階段」はなくなることによって、また「チョーサー集」は売却されることによって、パラドクシカルに社会との接点が生じ、物語の転換点が形成され²¹⁾、それを機に一挙に物語はハッピーエンドの解決へと向かい、主人公に幸運をもたらす²²⁾。その結果ハインリヒは、それまで自画自賛していた「貧困の哲学」と隠遁生活をいともあっさりと放棄し、ヴァンデルメーアを仲介にクララの父親とも和解し、社会からの祝福を享受し市民権を獲得することになる。

このように現実に対するアンビヴァレントな態度、つまり懐疑主義と楽観主義とが混在しているハインリヒの行動の諸矛盾を、語り手はフモールとイロニーとでもってハインリヒ自身の口を借りて語らせることによって読者に垣間見せてくれるのであるが、作者ティークのこのようなイロニーッシュな視線が初期のものと比べてここでは随分と介入してきていることは明らかである。彼は「観る側」の者として、以前よりは対象からは距離を置き、情熱の狂気、人間の愚を冷静に捉え、それを短編小説という珠玉の形式に結晶させているのである。

結 語

M・タールマンは、「転換点」「枠物語」などのノヴェレの特徴的構造が、既に初期のメールヒェンに見うけられることを指摘しているし²³⁾、G・クルスマンも、„Der blonde Eckbert“をメールヒェンノヴェレと呼んで、二つのジャンルの折衷的構造をそこに見ている²⁴⁾。しかし„Der blonde Eckbert“では、主人公夫妻は唯一の友人と思われていたヴァルターの発した一言が引金となり破滅への道を辿っていくのに対し、ここでは友人ヴァンデルメーアの突然の出現により二人は幸福を授けられる。救世主としての友人の登場という構図は、同じく後期の短編„Die Gemälde“ (1823年)でも使われている。また初期のメールヒェンのデモーニッシュな迫力は和らぎ、メールヒェンの次元では解決を見なかった相反するものの葛藤が、ここでは「社交」をメディアとして日常の次元で融和されている。形式的な相関性はあるものの、このような物語の基調、殊に結末の相違に注目し、R・パウリンは、「後期のティークの特徴は、様々な階層の止揚、牧歌的な雰囲気、迂余曲折を経た後の葛藤の解消にある。そして全ての人物は、最終的には社会の秩序へ組み入れられることにな

る。』²⁵⁾と評している。

後期ティークに関しては、若々しい力と深みが欠けているといったネガティブな評価が多々ある反面、中世が生々と描写されている戯曲や²⁶⁾、物語り術の粋が集められている短編²⁷⁾を当時から既に高く評価する声も聞逃がすことはできない。ティーク自身は明言を避けているものの、ゾルガー哲学のイロニーの弁証法を彼が短編で実践していることは、多くの研究者の認める所である。クンツも指摘しているように、対話と筋との有機的連続性に関して言えば（ハインリヒの殆んど部分は無意味な言葉の遊戯であることから察しがつくが）後期短編では稀薄となっている²⁸⁾。むしろ両者は、仲介を拒むように並走している。しかしそれだからこそそれぞれテーゼ・アンチテーゼとして図式的な定立が容易となり、結末のジンテーゼを巧みに導くことに成功しているともいえるだろう。その実験空間としての短編に、ティークは「社交」という新たな観点を導入している。「ティークの短編は緊迫した筋よりも、緊張を緩和するような人間の描き方に気を配っている。」²⁹⁾とグンドルフは述べているが、「社交」の洗練された形式である対話と省察を織り交ぜた短編小説は、運命の気まぐれ、またハインリヒの不可解な行動に象徴されている生の内包する諸矛盾を明確にした上で解決するのに最適な小宇宙となっている。ここで内面と外界、ファンタジーと現実というお馴染みの二極の対立項は、物語にも出てくる「寛容」「いたわり」の目を通して戯れの域へと止揚され、均衡のとれた関係が生じているのである。

ドレーズデンに移ってからのティークは、文学サロンから貴族、大市民へと交遊範囲が限定されていったのだが、それだけにこうした俯瞰的な視点を獲得できたのである。ファンタジーが現実の喪失をいかなる形でも補償することのなかった他の多くのロマン派の面々とは対照的に、ティークは国家との関係なども含め日常の次元での生の多様性へと目を向けていく。1840年前後のティークは妻や娘の死という不幸に見舞われ³⁰⁾、また「若いドイツ派」をはじめとする数々の論敵の攻撃にも曝され³¹⁾、心身共良好な状態とは言えず、また文明の進歩についても悲観的になっていた。しかし「短編小説」という自身の世界を構築することによって、人間の営みには全て宥和があることを力強く訴えているように思われる。

《TEXT》

Ludwig Tieck, Werke in vier Bänden hrsg. von Marianne Thalmann Band III
München 1963

(以下 Bd. III と略記)

〔注〕

1) Vgl. Paulin, Roger : Ludwig Tieck Stuttgart Metzler 1987 S. 80

伯爵は、前年4月に亡くなっている。

2) Vgl. Paulin, Roger : a. a. O. S. 84

友人 Lüttichau の推薦で、1824年宮廷劇場監督、翌1825年には宮廷顧問官に任命されている。

- 3) Vgl. Paulin, Roger : Ludwig Tieck A literary biography Clarendon Press Oxford 1986 S. 328
- 4) Bd. III S. 895
- 5) Bd. III S. 898
 終わりと始めが一体となり円環を成すという意味で、彼は「蛇」を理解と正義の象徴として持ち出している。
- 6) Vgl. Minor, Jakob : Tieck als Novellendichter Beiträge zur Literatur Wissenschaft. 1 (1884)
 In : Wege der Forschung Ludwig Tieck Darmstadt 1976 S. 71
- 7) Vgl. Lillymann, William J. : Reality's Dark Dream The Narrative Fiction of Ludwig Tieck, de Gruyter, Berlin New York 1979 p. 127
- 8) Bd. III S. 918
- 9) Vgl. Wiese, Benno von : Ludwig Tieck „Des Lebensüberfluß“ In : Die deutsche Novelle von Goethe bis Kafka : Interpretationen. Bd. 1. Düsseldorf August Bagel Verlag, 1956 S. 128—9
- 10) Vgl. Ottmann, Dagmar : Angrenzende Rede : Ambivalenzbildung und Metonymisierung in Ludwig Tiecks späten Novellen Tübingen : Stauffenburg-Verl. 1990 S. 66
- 11) Bd. III S. 899
 ハイน์リヒは、自らを古代ギリシアの禁欲主義の哲人ディオゲネスに喩えている。こうした表現は S. 936にも見られる。
- 12) Vgl. Ottmann, Dagmar : a. a. O. S. 58-60
- 13) Bd. III S. 896-7
- 14) Bd. III S. 906
- 15) Bd. III S. 906
- 16) Bd. III S. 931
- 17) Bd. III S. 932
- 18) Bd. III S. 927
- 19) Vgl. Wiese, Benno von : a. a. O. S. 131
 Wiese は、ハイน์リヒの現実をこのように受容していく姿勢に、ロマン派からビーダーマイヤーへのティークの変貌を見ている。
- 20) Bd. III S. 938
 「ゲッツ」でも、救いの神としてジッキンゲンが登場する。
- 21) Vgl. Mörtl, Hans : Ironie und Resignation in den Alterswerken Ludwig Tiecks Zeitschrift für die österreichischen Mittelschulen 1925 In : Wege der Forschung Ludwig Tieck Darmstadt 1976 S. 156
 Mörtl は、「転換点」とは神的なものが地上の存在へ降りて来て、至高なものが矛盾に満ちた生の中へ現われ出て、諸々の問題を予定調和的に解決する瞬間だと指摘している。この「転換点」の理論は、A. W. シュレーゲルが形式を確立し、ゲーテの「ノヴェレ」では文字通りその理論が実作となっている。
- 22) 初期のものではあまり見られないこうした結末は、メールヒェンのポジティブな部分といえよう。
- 23) Vgl. Thalmann, Marianne : Ludwig Tieck „Der Heilige von Dresden“ Aus der Frühzeit der deutschen Novelle. Quellen und Forschungen zur Sprach- und Kulturgeschichte der germanischen Völker, N. F. 3 (127) Berlin Walter de Gruyter 1960 S. 29
- 24) Vgl. Klusmann, Paul Gerhard : Die Zweideutigkeit des Wirklichen in Ludwig Tiecks Märchen-novellen In : Zfdph 83, 1964 S. 372
- 25) Vgl. Paulin, Roger : Metzler a. a. O. S. 90
- 26) Vgl. Wolff, O. L. B. : Encyclopädie der deutschen Nationalliteratur oder biographisch-kritisches Lexicon der deutschen Dichter und Prosaisten seit den frühesten Zeiten ; nebst Proben aus ihren Werken, 7 Leipzig Verlag von Otto Wigand 1842 S. 316

- 27) Vgl. Schaefer, Johann Wilhelm : Grundriß der Geschichte der deutschen Literatur 3. Aufl. Bremen Verlag von A. D. Geisler 1843 S. 138-139
- 28) Vgl. Kunz, Josef : Die deutsche Novelle im 19 Jahrhundert Berlin 1978 S. 17
- 29) Vgl. Gundolf, Fridrich : Ludwig Tieck In : Wege der Forschung Ludwig Tieck Darmstadt 1976 S. 236
- 30) Vgl. Paulin, Roger : Metzler a. a. O. S. 94
妻アマリエは1837年, 娘ドロテアは1841年に亡くなっている。
- 31) Vgl. Paulin, Roger : Metzler a. a. O. S. 9
彼らは前期ティエックのロマンティックな多様性はむしろ評価しているが, 強烈な批判の対象となったのは, 後期の「醒めた眼」であった。

Ludwig Tiecks „Des Lebens Überfluß“ —— Über das Gesellschaftsproblem ——

Koji MIKI

*Abteilung der Allgemeinen Bildung von
der Naturwissenschaftlichen Universität Okayama*

1-1 Ridaicho, Okayama 700 Japan

(Am 30. September 1992 empfangen)

Dieser Aufsatz behandelt das Werk Tiecks „Des Lebens Überfluß“. Dieses Werk ist die typische Novelle des späten Tiecks. Es schließt viele novellistische Eigentümlichkeiten, z.B. Wendepunkt, Dingsymbole, Stilfigur der Rhetorik usw. ein. Wir sehen auch darin die Ambivalenz zwischen Außenwelt und Innenwelt, die sogenannte Tiecks lebenslang dichterisches Thema ist. Aber dieser Konflikt hat hier realistische Züge, die es in den romantischen Frühwerken selten gibt. Es geht besonders um den Verlauf, in dem das Liebespaar der Hauptpersonen einmal verlorene Realität wieder gewinnt und der Konflikt endlich gelöst wird. Ich möchte dieses Werk hauptsächlich unter dem Zentralaspekt von ihrer Beziehung zur Gesellschaft mit Hilfe der Untersuchungen von R. Paulin, D. Ottmann, B. v. Wiese, W. J. Lillymann usw. betrachten.